

短期大学学生の家庭形成・家庭生活・男女の役割分担の意識について

本学学生のアンケート調査を中心にして

成井恵子

Gender Awareness of Junior College
Students — family and Partnership

by Shigeko NARUI

キーワード 家庭、家庭生活、結婚、配偶者、家族、性役割

男女共同参画の意識に関して、本学の学生を対象に結婚、家庭の形成、男女の役割分担意識、平等意識を知るために、1) 結婚と家族形成、2) 性役割平等主義、3) 平等主義的性役割態度の調査を実施した。それらの結果をまとめ、茨城県、および国の調査と比較して、短期大学生の考え方および対応態度の特徴を検討した。

はじめに

「茨城女子短期大学紀要」第28集において、短期大学（本学）学生のジェンダー意識と男女性スケール意識について、小規模の調査結果についての考察を行なった。そのまとめの項において、今後の一つの課題として、家庭・家族・結婚とは何か、家庭に重点を置いた男女の役割分担の平等とはどのようなことか、自分のライフスタイルをどう描いていくのかを検討したいと記述した。この報告は、それに対応するもので、特に、男女の役割分担意識と平等感について検討したものである。調査は、「女性と社会」選択の本学学生で、回答者は年度の受講生数と授業日の出席状況によって相違するが、全体数は44人から58人の範囲である。

一方、茨城県知事公室女性青少年課による「茨城県男女共同参画社会県民意識調査報告書」のダイジェスト版が、平成13年3月に発行され、類似の調査結果が含まれている。このデータを比較し、学生と社会人との相違についての分析も可能となった。この調査の回答の有効数は、女性997人、男性767人、計1764人である。

さらに、家族という概念・機能等について、現代の社会との関係のなかで検討したいとの目標もあった。この点に関しても、初歩的なものではあるが、要素の関連付けを行った。

1. 結婚による家庭の形成

対象の学生は、両親、兄弟、あるいは祖父母とともに、一つの家庭に属し、意識の度合いは様々であるが、家庭、家庭生活をしている。その家庭の様相が与える影響もあろうが、いま自分が理想として描いている家族、家庭、自分の結婚とパートナーとして選択する配偶者の条件（性格）等について調査した。その結果は、表1 a)、1 b)および表2の通りである。

まず表1 a)に関しては、調査対象の年度によって多少の揺れはあるが、約90%の学生は結婚すると回答し、残る10%は、現在のところ結婚する気持ちではないと回答している。つぎに、結婚を希望していない学生も結婚すると仮定して、結婚の法的形式を尊重するか否か、結婚式挙行の有無、披露宴、新婚旅行の実施について質問した。全体的な形としては、

- 1) 「法律婚」が91%、「事実婚」と「わからない」が9%、
- 2) 「結婚式挙行」が86%、「挙行しない」と「わからない」が14%
- 3) 「披露宴・パーティーを行う」72%、「行わない」「わからない」28%
- 4) 「新婚旅行に行く」が92%、「行かない」「わからない」が8%

となっている。法律婚で結婚式は行い、新婚旅行には行くとの方向付けである。伝統的な親戚、先生、先輩、友人を招待しての披露宴は、約70%の学生が行うと回答している。

つぎに、配偶者として希望する男性像（性格、性質）に関しては、表1 b)の通りである。この項目は、複数の自由記述によるが、2つの調査年ともほぼ同様の結果となって現れている。

約60%の学生が、配偶者の人物像に「優しい人」を上げている。この優しい人の持つ内面の把握は簡単ではないが、以下のような性格を備えた人物となろう。

- 1) 周囲に気を使って控えめで、つつましい。
- 2) 向かい合っていると、優美で風情がある。
- 3) 素直で、おとなしい。
- 4) 情が細やかである。
- 5) 健気である、神妙である。
- 6) 人の傷みがよくわかる。

このことは、家庭の機能としての「愛情・情緒的安定」を保証すると考えているのであろう。(図1 a)および1 b)参照)

つぎに、約40%の学生が、「経済力・生活力のある人」を上げている。豪華な生活を求めてはいないが、「生活経済」の側面を保証される必要を求めている。関連して、そのためには「安定した仕事・職業を持つ人」を、13%から17%の者が記述している。さらに、「子供の好きな人」の要素を、約35%から38%の者が記述し、以下、「家事に協力してくれる人」「妻としての自分の立場を認めてくれる人」「思いやりがあり」「一緒にいて楽しく、気の許せる人」を上げている。これらのことは、「愛情・情緒的安定」に加えて「生産・家事サービス」の機能を指摘しているのである。

趣味の一致を求めるものが、「スポーツ・旅行の好きな人」になろう。

表1 結婚・配偶者に関する希望調査

1 a) 結婚について

	2000年(45名)	2001年(47名)	2002年(48名)	140名
将来結婚は				
する	40 (89%)	42 (89%)	45 (94%)	127 (91%)
しない	5 (11%)	5 (11%)	3 (6%)	13 (9%)
結婚する場合(全員が結婚すると仮定して)				
法律婚	42 (93%)	43 (91%)	42 (88%)	127 (91%)
事実婚	3 (7%)	3 (6%)	5 (10%)	11 (8%)
わからない	0	1 (2%)	1 (2%)	2 (1%)
結婚式は				
挙行する	40 (89%)	37 (79%)	44 (92%)	121 (86%)
行わない	5 (11%)	5 (11%)	2 (4%)	12 (9%)
わからない	0	5 (11%)	2 (4%)	7 (5%)
披露宴(パーティ)				
行う	31 (69%)	34 (72%)	36 (75%)	101 (72%)
行わない	12 (27%)	12 (26%)	7 (15%)	31 (22%)
わからない	2 (4%)	1 (2%)	5 (10%)	8 (6%)
新婚旅行				
行く	40 (89%)	44 (94%)	45 (94%)	129 (92.2%)
行かない	4 (9%)	3 (6%)	2 (4%)	9 (6.4%)
わからない	1 (2%)	0	1 (2%)	2 (1.4%)

1 b) 配偶者について

配偶者として望む性格・性質など

(複数自由記述)

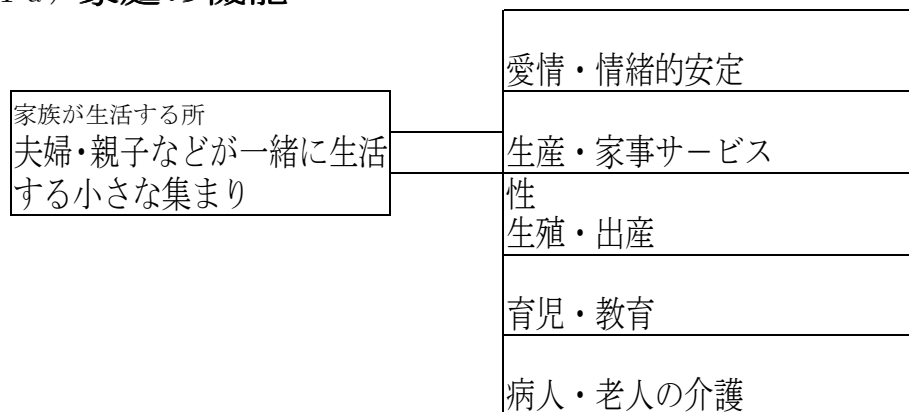
2000年(回答者45名)		2001年(回答者47名)	
優しい人	28 (60%)	優しい人	28 (59.5%)
経済力のある人	19 (42%)	経済力・生活力のある人	17 (36%)
子供の好きな人	17 (38%)	子供の好きな人	16 (34%)
妻として愛してくれる人	8 (18%)	家事に協力してくれる人	10 (21%)
家事を手伝ってくれる人	6 (13%)	妻の立場を考えてくれる人	9 (19%)
安定した職業を持つ人	6 (13%)	きちんとした仕事を持つ人	8 (17%)
頼れる人	4 (9%)	思いやりのある人	5 (11%)
一緒にいて楽しい人	4 (9%)	一緒にいて全てを話せる人	4 (9%)
思いやりのある人	3 (7%)	包容力のある人	4 (9%)
スポーツ・旅行の好きな人	3 (7%)	スポーツ・旅行の好きな人	2 (4%)

表2 核家族か直系家族か (結婚後の家族の形)

	2000年(45名)	2001年(47名)
核家族	34 (76%)	35 (75%)
直系家族	11 (24%)	11 (23%)
どちらでもよい	0	1 (2%)

図1 家庭と家庭生活の機能・枠組み

1 a) 家庭の機能



1 b) 家庭生活の枠組みと側面 (ファセット)

枠組みなど	側面
生活価値	生活価値
生活行動 生産行動 (家事労働) 労務行動 労働市場 購買行動 商品市場 財務行動 金融市場	家族関係 (生活時間) 生活経済
生活環境	生活空間 生活時間

つぎに、新しく家族を形成するとき、約75%は核家族を希望し、23%から24%は直系家族を考えている。その場合、自分の実の両親であるならの条件を示す者が、少数ながら存在する。(表2参照)

家庭生活にある「生活価値」とは、家庭生活を営んでいく際の望ましさのことであり、「生活像」または「生活世界像」である。この生活像をイメージとして描きながら、それを広く筋の通ったものとする努力を、思想と呼んでいる。ライフスタイルは、これによって形成・規定され、自己実現へと向かっていくと考える。

図1の a)家庭の機能、b)家庭生活の枠組みとその側面は、谷村賢治「現代家族と生活経営」第2章を参考にして作成したものである。家族が生活する場としての家庭の機能を、「愛情に基盤をおいて情緒を安定させること」「衣食住の確保と家事の運営」「出産・育児・教育に関すること」「健康管理と病人の介護」を中心に、理想の家庭像を描く基礎を作った。これは、つぎの調査項目の回答に何らかの刺激となり、連携の生まれることを期待したためである。

2. 男女の役割分担について

男女共同参画社会を形成するための基本理念には、1. 男女の人権の尊重、2. 社会における制度または慣行についての配慮、3. 政策等の立案及び決定への共同参画、4. 家庭生活における活動と他の活動との両立、5. 国際的協調が含まれている。この基本理念の1. および4. に関連して、本学学生を対象に調査を実施し、表3 a) および3 b) に提示した「性役割平等主義スケール」と、表4 a) および4 b) に提示した「平等主義的性役割態度スケール」の調査結果を得た。

主義とは、ある思想・考えに対する明確な一つの立場や主張であり、それに基づいて特定の制度・体制が形成されるのである。態度も主義によって決められ、考え方によって対処する形が生まれると見られる。したがって、性役割平等主義と平等主義的性役割態度の二つの調査を、関連性を視野にいれながら、分析することとする。

2. 1. 性役割平等主義について

この調査は、将来結婚するとしたならば、理想とする結婚生活のありかたはどのようなものかを考えるものである。既成調査方式により、提示した14項目に5段階の程度を設定し、該当個所をチェックする方法で実施した。所要時間は15分程度であった。その集計結果を、表3 a) 2001年調査、3 b) 2002年調査として示した。

まず、「理想とする」および「やや理想とする」の項目にチェックされた比率の高い内容を抽出すると、つぎの通りとなる。

I. 家事は夫婦の共同作業とするか、どちらがやるか、夫婦で話し合ってきめる。					
2001年	理想とする	45%	やや理想とする	35%	計80%
2002年	〃	36%	〃	36%	計72%
II. 妻が、風呂や夕食を用意して、仕事帰りの夫を出迎える。					
2001年	理想とする	44%	やや理想とする	30%	計74%
2002年	〃	16%	〃	43%	計59%
III. 妻は、夫が仕事で成功するよう夫のためにつくす。					
2001年	理想とする	30%	やや理想とする	23%	計53%
2002年	〃	11%	〃	32%	計43%
IV. 妻が、夫より早起きして、朝食を用意する。					
2001年	理想とする	30%	やや理想とする	33%	計63%
2002年	〃	18%	〃	36%	計54%
V. 妻がフルタイムの仕事で働けるよう、夫は家事や育児のできる限りの協力をする。					
2001年	理想とする	28%	やや理想とする	35%	計63%
2002年	〃	27%	〃	27%	計54%

この年別の数値は、該当年度における学生の集団としての性格・気質が変化するため、経年変化を認めた分析をするのは適切ではないと考えるが、2002年の方がパーセントの数値は下がっている。全体を一つの傾向としてみると、思想・主義の未成熟さのようなもの、あるいは女性としての過渡期の姿が示されているように感じられる。学生の年齢は、

表3 性役割平等主義スケール

3 a) 2001年調査(平成13年度) 回答者57名

	F	G	H	I	J
1. 妻がフルタイムの仕事で働けるよう、夫は家事や育児のできる限りの協力をする	16 28%	20 35%	8 14%	9 16%	4 7%
2. 結婚後、妻は夫の姓を名乗らず旧姓を使用する	5 9%	2 4%	9 16%	13 23%	28 49%
3. 妻が職を失わないですむよう、夫が育児休暇をとるなどして、育児に積極的にかかわる	7 12%	13 23%	17 30%	15 26%	5 9%
4. 家事は夫婦の共同作業とするか、どちらがやるか、夫婦で話し合って決める	26 45%	20 35%	9 16%	1 2%	1 2%
5. 夫より立場が弱くならないよう、妻が自立の意識をもって地位向上をめざす	7 12%	9 16%	31 54%	7 12%	3 5%
6. 妻が、風呂や夕食を用意して、仕事帰りの夫を出迎える	25 44%	17 30%	10 17%	2 4%	3 5%
7. 夫が、家族より仕事からみの人間関係を優先して生活する	0	5 9%	5 9%	30 52%	17 30%
8. 妻は主に家庭のこを受持ち、夫は主に職場で働く	4 7%	20 35%	19 33%	12 21%	2 4%
9. 男の子は男らしく、女の子は女らしく育てる	8 14%	18 31%	16 28%	12 21%	3 5%
10. 妻は、夫が仕事で成功するよう夫のためにつくす	17 30%	13 23%	20 35%	4 7%	3 5%
11. 妻がキャリアをもつことよりも、子育てに生き甲斐を見出す	7 12%	14 24%	27 47%	5 9%	4 7%
12. 夫が高収入を得ることで、夫だけの収入により家計を支える	10 17%	12 21%	18 32%	16 28%	1 2%
13. 妻が、夫より早起きして、朝食を用意する	17 30%	19 33%	15 26%	4 7%	2 4%
14. 夫婦間のセックスでは、妻は基本的に受け身で夫に主導権がある	9 16%	5 9%	32 56%	6 10%	5 9%

記号の内容— F理想とする Gやや理想とする Hどちらでもない

Iあまり理想としない J理想としない

表3 性役割平等主義スケール

3 b) 2002年調査(平成14年度) 回答者44名

	F	G	H	I	J
1. 妻がフルタイムの仕事で働けるよう、夫は家事や育児のできる限りの協力をする	1 2 27%	1 2 27%	1 1 25%	9 20%	0
2. 結婚後、妻は夫の姓を名乗らず旧姓を使用する	1 2%	3 7%	1 5 34%	9 20%	1 6 36%
3. 妻が職を失わないですむよう、夫が育児休暇をとるなどして、育児に積極的にかかわる	5 11%	1 6 36%	1 2 27%	8 18%	3 7%
4. 家事は夫婦の共同作業とするか、どちらがやるか、夫婦で話し合って決める	1 6 36%	1 6 36%	1 0 23%	2 4%	0
5. 夫より立場が弱くならないよう、妻が自立の意識をもって地位向上をめざす	0	1 6 36%	1 9 43%	6 13%	2 4%
6. 妻が、風呂や夕食を用意して、仕事帰りの夫を出迎える	7 16%	1 9 43%	1 2 27%	4 9%	2 4%
7. 夫が、家族より仕事がらみの人間関係を優先して生活する	1 2%	2 4%	1 3 29%	1 2 27%	1 6 36%
8. 妻は主に家庭のこゝを受持ち、夫は主に職場で働く	1 2%	1 2 27%	1 8 41%	9 20%	4 9%
9. 男の子は男らしく、女の子は女らしく育てる	4 9%	1 5 34%	1 5 34%	6 13%	4 9%
10. 妻は、夫が仕事で成功するよう夫のためにつくす	5 11%	1 4 32%	1 6 36%	6 13%	3 7%
11. 妻がキャリアをもつことよりも、子育てに生き甲斐を見出す	1 2%	1 3 29%	1 7 38%	1 0 23%	3 7%
12. 夫が高収入を得ることで、夫だけの収入により家計を支える	1 2%	1 2 27%	1 6 36%	1 3 29%	2 4%
13. 妻が、夫より早起きして、朝食を用意する	8 18%	1 6 36%	1 3 29%	3 7%	4 9%
14. 夫婦間のセックスでは、妻は基本的に受け身で夫に主導権がある	0	9 2%	3 0 68%	3 7%	2 4%

記号の内容――F理想とする Gやや理想とする Hどちらでもない

Iあまり理想としない J理想としない

表4 平等主義的性役割態度スケール (短縮)

4 a) 2001年調査 (平成13年度) 回答者57名

	A	B	C	D	E
1. 女性が社会的地位や賃金の高い職業を持つと結婚するのが難しくなるので、そういう職業を持たないほうがよい。	0	1 2 2%	1 6 28%	2 2 38%	1 8 31%
2. 結婚生活の重要事項は夫が決めるべきである	0	3 5%	9 16%	1 7 3%	2 8 49%
3. 主婦が働くとき夫をないがしろにしがちで、夫婦関係にひびがはりやすい。	2 4%	9 16%	1 5 26%	1 4 24%	1 7 3%
4. 女性の居るべき場所は家庭であり、男性の居るべき場所は職場である	4 7%	4 7%	7 12%	1 3 23%	2 9 51%
5. 主婦が仕事を持つと、家庭の負担が重くなるのでよくない	1 2%	6 10%	1 3 23%	2 3 4%	1 4 24%
6. 結婚後、妻は必ずしも夫の姓を名乗る必要はなく、旧姓で通してもよい	9 16%	1 5 26%	1 5 26%	1 1 19%	7 12%
7. 家事は、男女の共同作業となるべきである。	3 3 58%	1 3 23%	7 12%	4 7%	0
8. 子育ては女性にとって一番大切なキャリアである	1 4 24%	2 1 37%	1 7 3%	5 9%	0
9. 男の子は男らしく、女の子は女らしく育てることが非常に大切である	7 12%	1 2 21%	2 4 42%	9 16%	5 9%
10. 娘は将来主婦に、息子は職業人になることを想定して育てるべきである。	3 3 5%	3 5%	2 3 4%	1 1 19%	1 6 28%
11. 女性は、家事や育児をしなければならないから、フルタイムで働くよりパートタイムで働いた方がよい。	6 1%	1 7 3%	1 9 33%	1 0 17%	5 9%
12. 女性の人生において、妻であり母であることも大事だが、仕事をするのもそれと同じくらい重要である	1 1 19%	1 9 33%	2 0 35%	6 1%	1 2%
13. 女性は子どもが生まれても、仕事を続けた方がよい	6 1%	1 2 21%	2 7 47%	1 0 17%	2 4%
14. 経済的に不自由でなければ、女性は働かなくてもよい	3 3 5%	7 12%	2 6 45%	1 7 3%	4 7%
15. 家事や育児をしなければならないから、女性はあまり責任の重い、競争の激しい仕事をしない方がよい	4 7%	1 0 17%	2 8 49%	9 16%	6 10%

記号の内容―― A 賛成である B やや賛成である C どちらでもない
D やや反対である E 反対である

表4 平等主義的性役割態度スケール (短縮)

4 b) 2002年調査 (平成14年度) 回答者44名

	A	B	C	D	E
1. 女性が社会的地位や賃金の高い職業を持つと結婚するのが難しくなるので、そういう職業を持たないほうがよい。	0 1	2 0	20 45%	15 34%	7 16%
2. 結婚生活の重要事項は夫が決めるべきである	2%		23%	36%	38%
3. 主婦が働くとき夫をないがしろにしがちで、夫婦関係にひびがはりやすい。	1 2%	8 18%	20 45%	10 23%	5 1%
4. 女性の居るべき場所は家庭であり、男性の居るべき場所は職場である	2 4%	3 7%	14 32%	12 27%	13 29%
5. 主婦が仕事を持つと、家庭の負担が重くなるのでよくない	0	7 16%	19 43%	14 32%	4 9%
6. 結婚後、妻は必ずしも夫の姓を名乗る必要はなく、旧姓で通してもよい	4 9%	10 23%	20 45%	7 16%	3 7%
7. 家事は、男女の共同作業となるべきである。	19 43%	17 38%	5 1%	2 4%	1 2%
8. 子育ては女性にとって一番大切なキャリアである	9 2%	19 43%	12 27%	3 7%	1 2%
9. 男の子は男らしく、女の子は女らしく育てることが非常に大切である	3 7%	17 38%	13 29%	10 23%	1 2%
10. 娘は将来主婦に、息子は職業人になることを想定して育てるべきである。	2 4%	4 9%	9 2%	18 41%	11 25%
11. 女性は、家事や育児をしなければならないから、フルタイムで働くよりパートタイムで働いた方がよい。	2 4%	19 43%	15 34%	6 13%	2 4%
12. 女性の人生において、妻であり母であることも大事だが、仕事をするのもそれと同じくらい重要である	6 13%	21 48%	13 29%	4 9%	0
13. 女性は子どもが生まれても、仕事を続けた方がよい	3 7%	12 27%	23 52%	5 1%	1 2%
14. 経済的に不自由でなければ、女性は働かなくてもよい	1 2%	6 13%	23 52%	12 27%	3 7%
15. 家事や育児をしなければならないから、女性はあまり責任の重い、競争の激しい仕事をしない方がよい	2 4%	7 16%	21 48%	11 25%	3 7%

記号の内容―― A賛成である Bやや賛成である Cどちらでもない
Dやや反対である E反対である

平均的には19歳である。

I. においての、家事労働を共同で実施するか、家事労働の種別によって話し合って分担を決める考え方に対しては、45%、36%が理想、「やや理想とする」を含めると80%、72%の学生が支持を示している。またV. での、妻がパートタイムではなくフルタイム仕事を持てるように、夫が家事労働や育児にできる限り協力するとの考え方にも、28%、27%が理想と答え、「やや理想とする」を含めると54%、63%の学生が支持をしている。

しかし、II., III. および IV. においての、朝食の用意、夕食や風呂の用意は妻が行い、夫が仕事で成功するよう夫のために尽くすの考え方に対しても、理想とする学生が、2001年では、項目 II. 44%、項目 III. 30%、項目 IV. 18%、そして2002年では、項目 II. 16%、項目 III. 11%、項目 IV. 18%存在し、考え方に一貫性を欠き、じぐざくを描いていることが感じられる。

つぎに、「理想としない」および「あまり理想としない」の項目にチェックされた比較的に高い比率のものを見ることにしたい。

VI. 結婚後、妻は夫の姓を名乗らず旧姓を使用する。					
2001年	理想としない	49%	あまり理想としない	23%	計72%
2002年	〃	36%	〃	20%	計56%
VII. 夫が、家族より仕事からみの人間関係を優先して生活する。					
2001年	理想としない	30%	あまり理想としない	52%	計82%
2002年	〃	36%	〃	27%	計63%
VIII. 妻が職を失わないですむよう、夫が育児休暇をとるなどして、育児に積極的にかかわる。					
2001年	理想としない	9%	あまり理想としない	26%	計35%
2002年	〃	7%	〃	18%	計25%
IX. 夫が高収入を得ることで、夫だけの収入により家計を支える。					
2001年	理想としない	2%	あまり理想としない	28%	計30%
2002年	〃	4%	〃	29%	計33%
X. 妻は主に家庭の事を受持ち、夫は主に職場で働く					
2001年	理想としない	4%	あまり理想としない	21%	計25%
2002年	〃	9%	〃	20%	計29%

これらの結果のうち、VI. の夫婦別姓の考え方は、「理想としない」が2001年49%と2002年36%（以下この年の順のパーセント）、「あまり理想としない」を合計すると27%と56%となり、夫婦同一姓の考えが強いと考えられる。また VIII. の夫が育児休暇をとって妻のフルタイム労働を支援する考え方は、「理想としない」が9%、7%であるが、「あまり理想としない」と合計すると35%、25%となる。

他方、VII., IX. および X. の項目は、「夫は職場、妻は家庭」の思想が中心をなしている。そのなかで、夫が家族よりも仕事からむ人間関係を優先する考え方(VII.)には、合計で

82%、63%が反対の意志を表明している。しかしながら、夫の高収入への依存、妻は家庭に比重をかけて生活するという考え方は、凡そ30%の学生に否定されているだけである。「夫より立場が弱くならないよう、妻が自立の意識を持って地位向上を目指す」との項目では、「どちらでもない」の、意識の明確化されていないものが、54%、43%と約半数を占めている状況である。明確な主義や態度を持たない割合が、多くなっている。これは、こうした調査の宿命かもしれないが。

2. 2. 平等主義的性役割態度について

ここでの平等主義的性役割態度とは、男女の平等主義・主張に基づく対応の態度が、どのようなものになるかを調査・検討するものである。調査項目は15項目の短縮型を使用し、5つの水準「賛成である」「やや賛成である」「どちらでもない」「やや反対である」「反対である」の適切な一つにチェックを記入する方法によった。

前項と同様に、まず各調査項目の、「賛成である」および「やや賛成である」の数値を検討したい。

XI. 家事は、男女の共同作業となるべきである。						
2001年	賛成である	58%	やや賛成である	23%	計	81%
2002年	〃	43%	〃	38%	計	81%
XII. 子育ては女性にとって一番大切なキャリアである。						
2001年	賛成である	24%	やや賛成である	37%	計	61%
2002年	〃	20%	〃	43%	計	63%
XIII. 女性の人生において、妻であり母であることも大事だが、仕事をするこ ともそれと同じくらい重要である。						
2001年	賛成である	19%	やや賛成である	33%	計	52%
2002年	〃	13%	〃	48%	計	61%
XIV. 結婚後、妻は必ずしも夫の姓を名乗る必要はなく、旧姓で通してもよい。						
2001年	賛成である	16%	やや賛成である	26%	計	42%
2002年	〃	9%	〃	23%	計	32%
XV. 女性は、家事や育児をしなければならないから、フルタイムで働くより パートタイムで働いた方がよい。						
2001年	賛成である	10%	やや賛成である	30%	計	40%
2002年	〃	4%	〃	43%	計	47%
XVI. 男の子は男らしく、女の子は女らしく育てることが非常に大切である。						
2001年	賛成である	12%	やや賛成である	21%	計	33%
2002年	〃	7%	〃	38%	計	45%
XVII. 女性は子供が生まれても、仕事を続けた方がよい。						
2001年	賛成である	10%	やや賛成である	21%	計	31%
2002年	〃	7%	〃	27%	計	34%

項目 XI. の「家事は、男女の共同作業」として実施する態度は、2001年、2002年とも、合計では81%を示している。家事労働は、短大の学生にとって把握しやすい内容であり、独立した家庭を持ったときに、妻である自分だけが行う事ではないとの意識が働いたのであろう。この意識のつながりで、項目 XIII. の妻であり母であることと、社会人として仕事を持つ体制も整えたいとするのが52%、61%の学生である。仕事を継続していくために、結婚後も旧姓で通して行くことも賛成しているのが項目 XIV. で、これらの合計は42%、32%である。家事の共同作業に対するの数値よりは低くなっている。さらに、子供が生まれても仕事を継続したいとの項目 XVII. の数値は、約30%となっている。

こうした賛成の領域の数値とともに、項目 XII. XV. および XVI. では、子育て、家事労働というものを女性に接近させる態度が、従来の旧い視野にもどっていると思われる。あるいは、主義としては男女共同分担ではあるが、実際の体制では女性の側に負担がかかるとの予想があるためか、女性の労働はパートタイムの方がいいとの態度になり、子供の教育に関しても、伝統的な「女は女らしく、男は男らしく」の態度が、約30%の学生によって支持されているのである。これも、一種の「じぐざぐ現象」、あるいは「新旧の間の揺れ」と考えられるのである。

さて、反対の側面、つまり「反対である」および「やや反対である」の結果を同様に眺めることにしたい。

XVIII. 女性の居るべき場所は家庭であり、男の居るべき場所は職場である。			
2001年	反対である51%	やや反対である23%	計74%
2002年	29%	27%	計56%
XIX. 結婚生活の重要事項は夫が決めるべきである。			
2001年	反対である49%	やや反対である30%	計79%
2002年	38%	36%	計74%
XX. 女性が社会的地位や賃金の高い職業を持つと結婚するのが難しくなるので、 そういう職業を持たないほうがよい。			
2001年	反対である31%	やや反対である38%	計69%
2002年	16%	34%	計50%
XXI. 主婦が仕事を持つと、家庭の負担が重くなるのでよくない。			
2001年	反対である24%	やや反対である40%	計74%
2002年	9%	32%	計41%
XXII. 主婦が働くとう夫をないがしろにしがちで、夫婦関係にひびが入りやすい。			
2001年	反対である30%	やや反対である24%	計54%
2002年	11%	23%	計34%
XXIII. 娘は将来主婦に、息子は職業人になることを想定して育てるべきである。			
2001年	反対である28%	やや反対である19%	計47%
2002年	25%	41%	計66%
XXIV. 経済的に不自由でなければ、女性は働かなくてもよい。			
2001年	反対である7%	やや反対である30%	計37%
2002年	7%	27%	計34%

項目 XVIII. の女性の居場所は家庭という役割態度、項目 XIX. の結婚生活の重要事項は夫が決定するとの体制、項目 XX. の女性の社会的地位や高賃金の職業に付いていると、結婚が難しくなるので、そうした職業は持たない方がいいとの態度、項目 XXI. の主婦が仕事を持つと（多分夫の、あるいはその家族の）家庭での負担が重くなるとの態度に対しては、「反対」と「やや反対」の合計で見ると数値は高くなっている。上限の数値が各項目とも70%、80%を示している。性役割の平等に対応する意識は、かなり高いと見て考えていいようである。ただし、主婦、妻が、職業を持つと夫婦関係がうまくいかなくなるとか、

経済的に不自由がなければ、女性、妻などは働かなくともいいとか、自分の子供に対しても、男女の伝統的な態度で教育し、男女の役割の平等をあまり意識していない態度・対応には、「反対」と「やや反対」の合計が30%から50%のとなっている。2002年調査の、自分の娘・息子に対する態度「娘は将来主婦に、息子は将来職業人になる想定で育てるべき」には、66%の学生が反対の態度を取ると示されている。

項目 XXII. の「主婦が働くとう夫婦関係にひびがはいる」については、「どちらでもない」が、2001年26%、2002年45%もある。同様に、項目 XXIII. の子供の育て方については、前述の反対領域のほかに、40%、20%の、項目 XXIV. に関しては、47%、52%の学生が、明確な対応・態度を決めていない状態である。じぐざぐ現象というのか、未成熟の現象と考えるべきなのか、判断に迷うところである。

3. 茨城県や国の意識調査との比較

家庭生活、男女の役割分担意識について、茨城県や国の調査結果を見ることにする。表5のa)およびb)は、「男は仕事、女は家庭」との社会通念となっていた言葉をキーワードにした調査である。平成12年(2000年)の結果では、「同感しない」が、茨城県の女性44.0%、男性35.5%、総理府の世論調査では、女性53.5%、男性41.9%を占めているが、反対側から見ると、「同感する」「どちらともいえない」の双方を合わせた比率も、茨城県の女性48.1%、男性54.0%、世論調査での女性45.9%、男性56.7%と示され、社会的に眺めると、意識の改革が徐々に進行する形を現していると考えられる。また、学生はすべて女性であるが、社会の男性の意識は、女性の意識と同等ではないことも再確認できる。男性のなかには、潜在的にこの意識が存在しているのかもしれない。

この傾向は、表6の「家庭生活における地位の平等感」にも見られる。「平等」と回答しているのは、総理府調査での男性45.9%、茨城県の男性33.0%、これに対して総理府調査での女性34.6%、茨城県の女性20.9%である。特に、茨城県の女性の平等感が低くなっている。この表では、平等」の意識より、「どちらかといえば男性優遇」が、上記の順番に示すと、36.4%、45.6%、43.4%、47.8%で、まだまだ、ぼんやりとはあるが、家庭生活では男性優遇の傾向にある。この社会的雰囲気といったものが、学生の調査結果における「じぐざぐ現象」につながると考えられる。

さらに、茨城県の調査結果のなかには、学生の意識・態度につながるものがある。

「妻が働くのはかまわないが、夫よりも帰宅が遅くなるのは問題だ」については、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」が、男性54.8%、女性55.0%である。また、「出世のためには、ある程度家庭生活を犠牲にしてもしかたがない」に関しては、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」が、男性31.9%、女性29.8%で、この反対の意見の割合が、男性65.3%、女性64.4%と示され、家庭生活を重視する考えが支配的になっている。

一方、「女性が結婚して子供を生んでからも、一生仕事を続けた方がよい」については、女性の賛成の2つの領域の計が57.7%、男性のそれが51.3%、反対の領域は、女性%、男性45.9%と、意見が二つに別れている状況である。

この結果から、意見・主義に全体としては、学生の未成熟さとは異なった揺れがあり、じぐざぐは男性と女性の間にも生じていることが感じられる。

表5 役割分担意識について(県・国の調査からデータを使用しての構成)

5 a) 「男は仕事、女は家庭」という性別分担意識について

平成12年(2000年)茨城県の調査結果

	女性	男性
同感する	10.8%	15.9%
どちらともいえない	37.3%	38.1%
同感しない	44.0%	35.5%
不明	7.9%	10.5%

過去の茨城県の調査	女性(平成元年)	男性(平成4年)
	女性	男性
同感する	19.6%	28.3%
どちらともいえない	39.5%	36.0%
同感しない	39.9%	34.0%
不明	0.5%	1.7%

5 b) 平成12年(2000年)総理府の男女共同参画社会世論調査結果

	女性	男性
同感する	21.4%	29.6%
どちらともいえない	24.5%	27.1%
同感しない	53.5%	41.9%
わからない	0.7%	1.5%

表6 家庭生活における男女の地位の平等感について(県・国の調査)

平成12年(2000年)

	茨城県		国	
	男性	女性	男性	女性
男性の方が非常に優遇	9.1%	15.5%	7.1%	13.3%
平等	33.0%	20.9%	45.9%	34.6%
女性の方が非常に優遇	1.0%	1.3%	1.1%	1.0%
どちらかといえば男性優遇	45.6%	47.8%	36.4%	43.4%
どちらかといえば女性優遇	8.6%	9.3%	6.5%	4.6%
不明	2.6%	5.1%	3.1%	3.2%

4. おわりに

男女の個人としての尊厳を重んじ、男女の差別をなくし、それぞれの人間としての能力を発揮できるような社会に、そして、家庭生活においても、共に家族の大事な構成員として、お互いに協力し、家族としての役割を果たして、価値のある自己実現、人生実現をとの観点から、男女共同参画社会のために努力が重ねられている。その中で、個人の、または人々の考え方が変化していく。しかし、ひとの心の変化は、かなり遅々としているとされる。男女の役割分担や平等感が、目標としている方向へ動いていることは確かであるが、「遅々としている」との感覚は否定することができない。

学生に関しては、社会生活・家庭生活での依存性と未熟さによる「じぐざぐ現象」が見られ、社会人に関しては、社会体制・慣習からの変革、脱皮の「揺れ」が見られた。

したがって、学生と社会人の意識の底に存在するもの、人生経験とか、生活の場にある背景、習慣等との関連もを検討しなければ、その特徴を見極めることが出来ないできないことが分かってきた。しかし、学生の主義・態度には、社会の考え方の反映が、比較的濃く現れていることも理解できた。

なお、参考文献については、本文中に記した。